

招待講演

講演者のプロフィール

定延 利之（さだのぶ としゆき）

【略歴】

1962年大阪府生まれ。京都大学大学院博士課程修了。博士（文学）。

専門は言語学・コミュニケーション論。

神戸大学教養部講師，国際文化学部講師，助教授，教授，国際文化学研究科教授，人文・人間科学系国際文化学域教授を経て，2017年から京都大学教授（現職）。神戸大学名誉教授。

【主要業績】

主な単著

『コミュニケーションへの言語的接近』（ひつじ書房，2016）

『日本語社会 のぞきキャラくり』（三省堂，2011）

『煩惱の文法』（筑摩書房，2008／凡人社，2016（増補版））

『ささやく恋人，りきむレポーター』（岩波書店，2005）

『認知言語論』（大修館書店，2000）

2018年の編著

『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』（ひつじ書房，2018）

『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』（三省堂，2018）

2018年の論文

- ・ The “My Funny Talk” Corpus and Speaking Style Variation in Japanese. In. David G. Hebert (ed.), *International Perspectives on Translation, Education and Innovation in Japanese and Korean Societies*, pp. 133-147, Springer.
- ・ 「枝分かれ」に関する覚え書き，日本語音声コミュニケーション，6，62-82.
- ・ オノマトペと感動詞に見られる「馴化」，小林隆（編）『感性の方言学』45-64，ひつじ書房.

言語行為への言語学的接近

— 権利・きもち・非流ちょう性・面白さをめぐって —

定延 利之 (京都大学)

現代の言語学は「基本は音声言語」という理念を掲げながら、実際には文字言語研究に集中しており、(音声それ自体の研究は別として) 音声言語の研究は盛んではありません。いや、最近では盛んと言うべきかもしれませんが、それらの研究は会話分析的・エスノメソドロジイ的ではあっても、いわゆる「言語学的」なものではありません。では、語句の形式・構造・意味にこだわる伝統的な言語学の姿勢で音声言語を眺めても、何も見えてこないのでしょうか？ この講演では、私自身の「言語学的」な日本語音声言語研究をもとに、音声言語の中心をなす言語行為を論じるための4つの観点として、「権利」「きもち」「非流ちょう性」「面白さ」を提案してみたいと思います。以下、それぞれの観点を現象例とともに挙げておきます。

1. 「権利」 乗り込んだレンタカーがなぜか動かない。車中の人間たちが原因を探るうち、1人が原因(運転座席の者がアクセルペダルと間違えてブレーキペダルを踏んでいる)を探り当てる。その時、「あ、ブレーキ踏んでる！」と言うことは、原因を発見すれば誰でも(たとえば後部座席の子供でも運転手の足もとを指しながら)できる。だが、「あ、ブレーキ踏んでた！」と言うことはそうではない。それは原則として、運転座席に座っている者の特権的行為である。
2. 「きもち」 明日は雨かと訊かれれば、「だ。」「です。」と答えるよりも「だな。」「ですね。」などと答える方がより自然である。また、予想が外れて、なおも虚勢を張る者の発話「だろう。わかってたよ」の「だろう」は、下降調より上昇調の方が自然である。たしかに伝統的な文法の言うとおりに、「だ」「です」「な」「ね」「だろう」のような付属的要素(いわゆる「付属語」)だけでは「文」はできない。だが「発話」は、きもちの現れ次第で(そして「応答発話」のような会話内の位置次第で)できる。
3. 「非流ちょう性」 名詞「いっぱい」のアクセント型は平板型なので、「人がいっぱいだ」と言う際の「だ」の音調は高い。だが、非流ちょうなコマギレ口調で「人がだな、いっぱいだな、来てだな、…」と言う際の「だ」の音調は決まって低い。
4. 「面白さ」 異国の街を走る観光バスの中で、同乗者に「ときどきレストランがあるね」と言うのは自然。だが、自宅付近の様子を他人に「うちの近所はときどきレストランがありまして…」と教えるのは不自然。時間副詞「ときどき」が空間分布(あちこち)を表せるのは、たとえば探索意識がかき立てられる、それなりに面白い経験の表現時のみ。

以上の提案に多少とも意味があるなら、音声言語に対する会話分析的・エスノメソドロジイ的な研究と伝統的な言語研究を結ぶ「発話の文法」が構築・追究可能と考えています。